

11) カタクリ=片栗

カタクリはユリ科の多年草である。北海道から、本州の北部に多く見られ、四国、九州では稀である。落葉樹林の下などの北向き斜面に群落をつくって自生することが多い。最近では乱獲がたたって、関東周辺ではあまり見られなくなってしまった。東北地方から中部地方にかけては今も見事な群落が見られ、なんとかこのまま残したい野草の一つである。学名は『*Erythronium japonicum*』で、イギリスでは『dogtooth violet』、また中国では『車前葉山慈姑』で、これは誤用ともいわれている。

カタクリの根は小さな球根状で、多量の澱粉が含まれており、初夏、根を掘り起こして突き砕き、水にさらして精製したものが片栗粉である。クズなどと並んで良質の澱粉が得られることから、高級菓子の材料や食料として長いこと利用されてきた。このために乱獲がたたったわけで、今では澱粉はジャガイモなどから作られ、この花の危機はとりあえず回避されたといってもいいかもしれない。しかし全草が食用になるため、特に若葉は山菜として天ぷらなどにもされている。

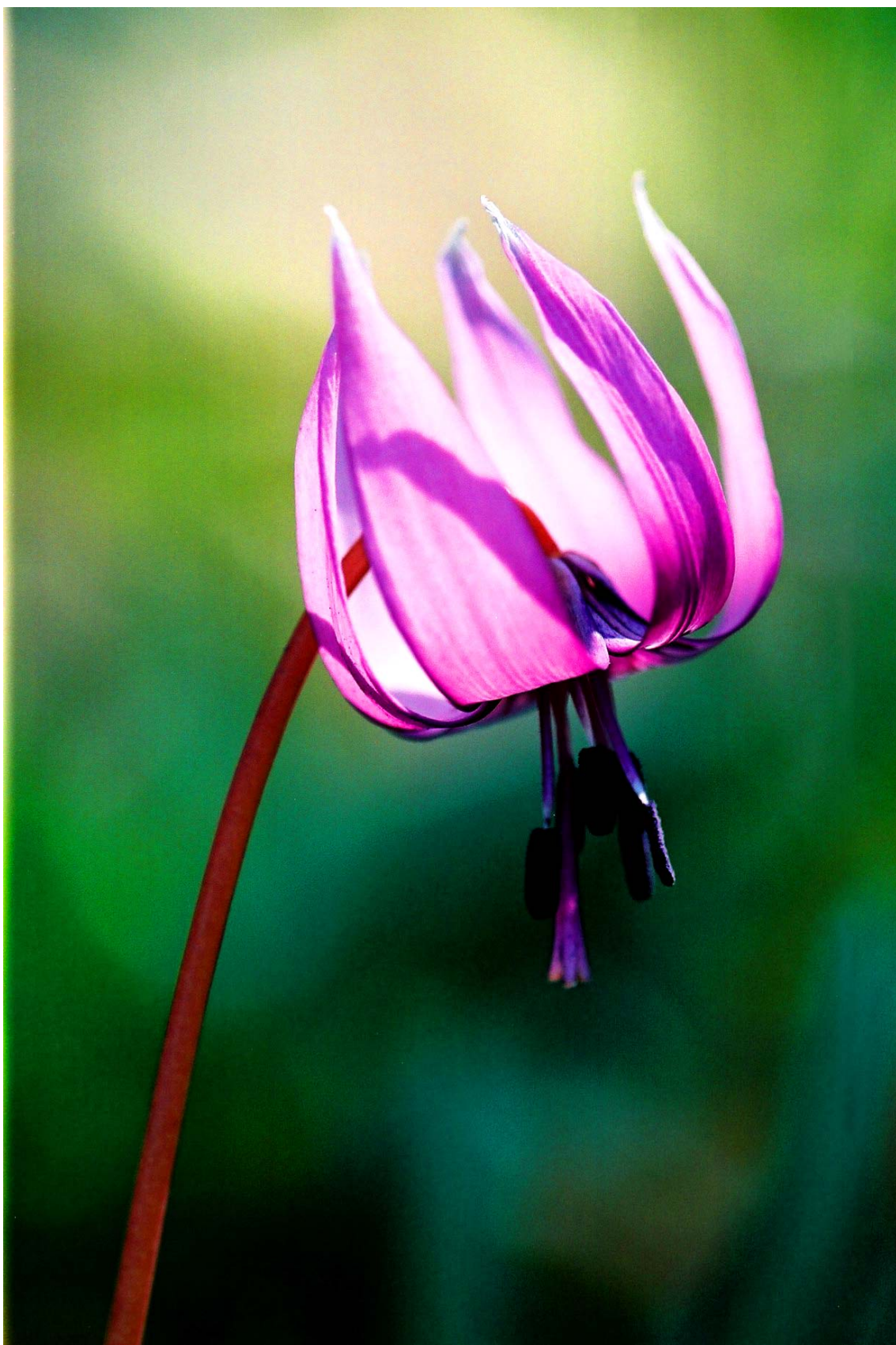
カタクリという名称の由来は、もとはカタカゴといわれていたものが、いつの頃からかカタユリとなり、それが今日のカタクリになったといわれている。カタコとは傾いたという意味で、カタカゴは傾いて咲く籠状の花というほどの意味であろうか。うつむきがちに咲くこの花の印象をよく表わしている。

カタクリが文学に初めて登場するのは『万葉集』で、大伴家持の歌は有名である。

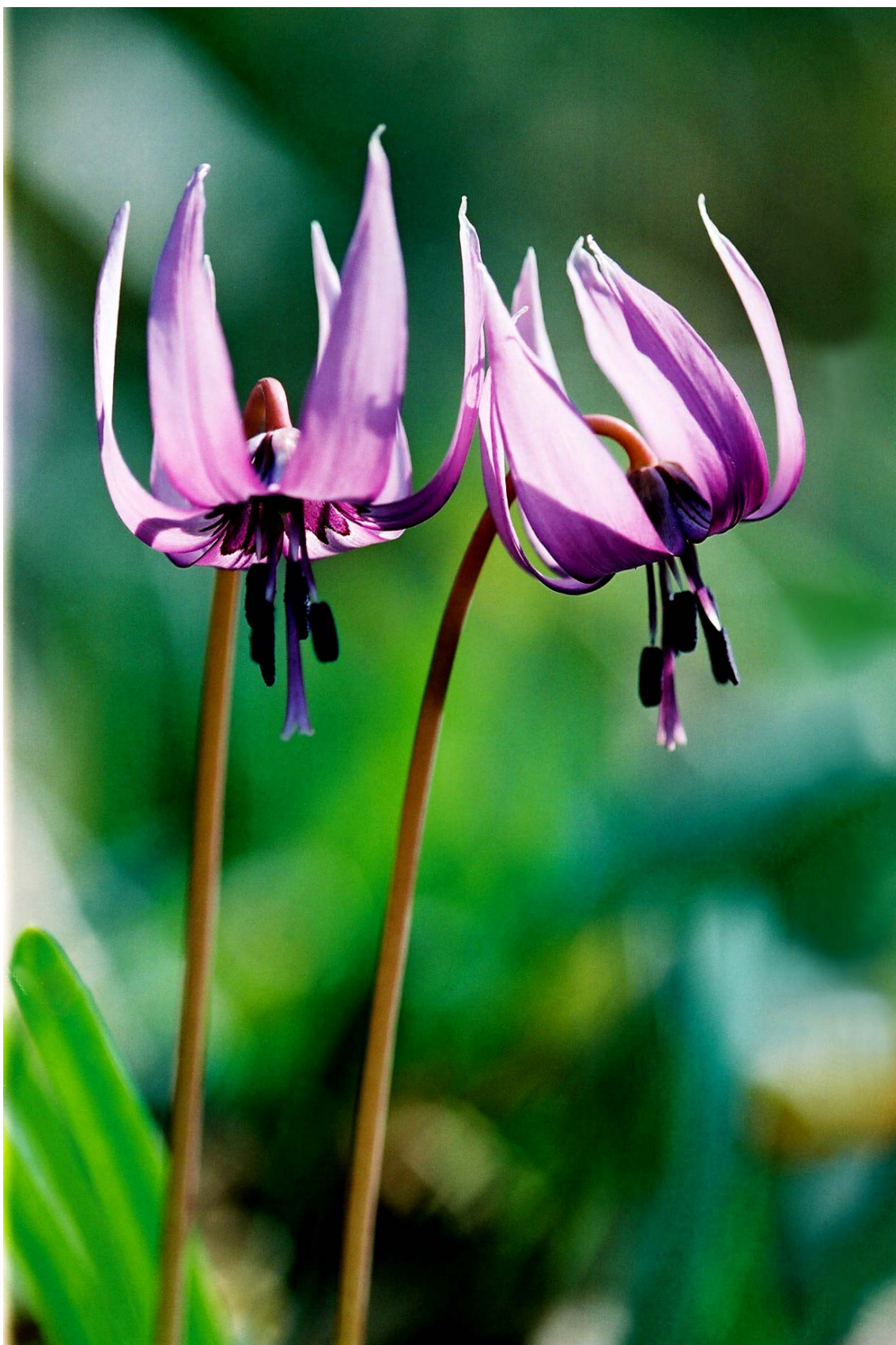
もののふの八十(ヤ)をとめらが汲(み)まがふ 寺井の上の堅香子(かかご)の花
この花は比較的地下水の高い土を好むようで、付近には溪流やせせらぎが流れていたり、地下水がハケとなって滲み出ているところも多い。寺井の上の堅香子とはそんな場所なのだろう。従ってこの花を植えるにはそういう場所が必要で、なかなか個人の庭で栽培するというわけには行かない。むしろ信州の戸隠高原や茨城県内原町の有賀神社、近いところで栃木県佐野市の三毳山(ミカモヤマ)、千葉県柏市の逆井、東京練馬区のカタクリ自生地などに足を運んで、雄大な群落をゆっくりと鑑賞すべきであろう。埼玉県の秩父や栃木県、群馬県にも群落地があるが、東北地方まで足を伸ばせば、いたるところで大群落を見ることができる。特に秋田県の中仙町や鳥海町は付近にひなびた温泉も多く、湯につかりながらカタクリの花見など、なかなか洒落ている。関東周辺ではお彼岸頃が見頃で、桜よりも一足早い花見が楽しめる。

カタクリは通常種子で殖えるが、この種子の先端には『[エライオソーム](#)』(01-02-08 マブキソウの項参照)という物質がついており、これはアリの好物でせっせと種子を運ぶ。こうして巧みに遠くまで運ばれて、そこで発芽する仕組みになっている。

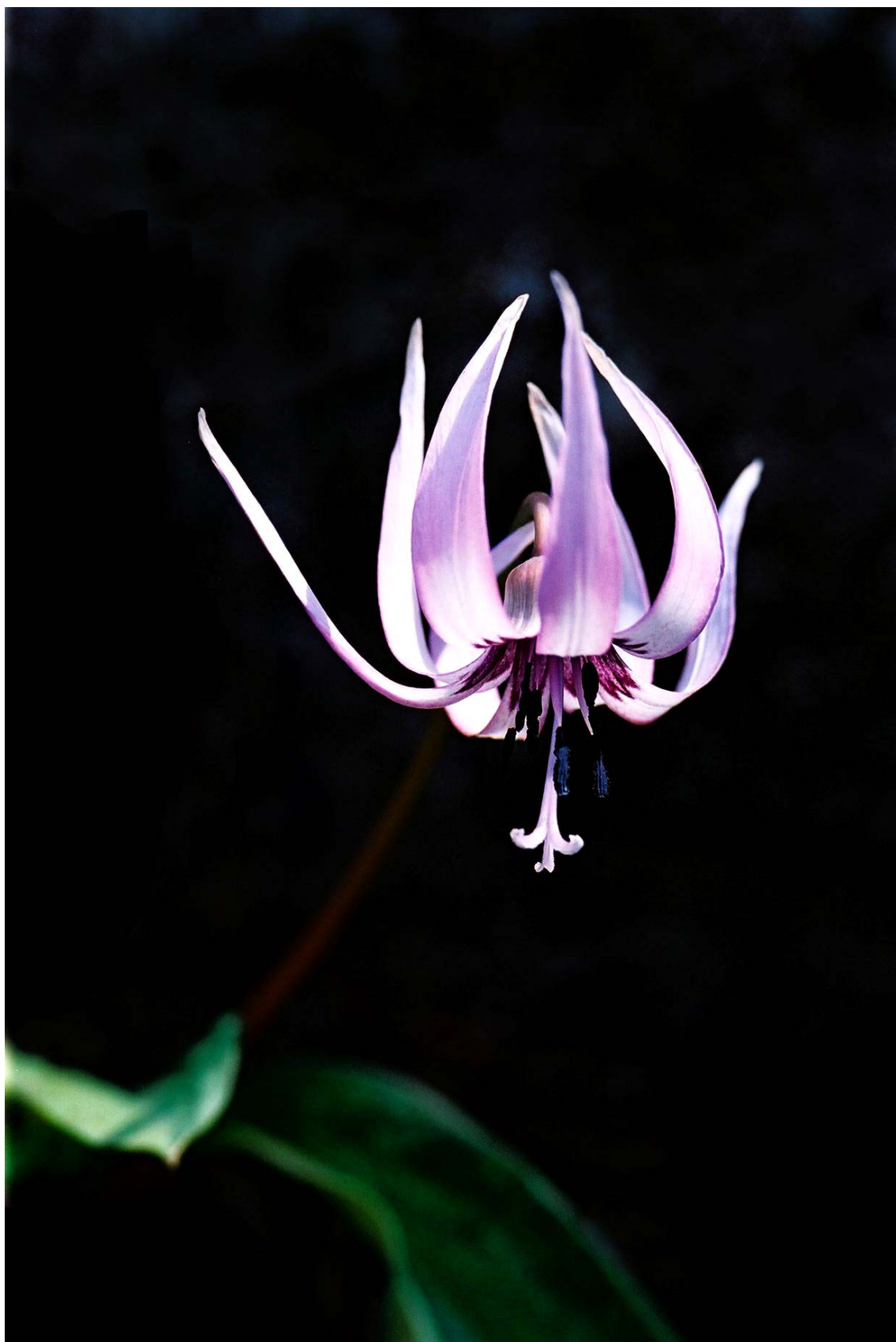
カタクリには園芸品種もあり、黄花カタクリとして売られていることも多い。北アメリカを原産地とするもので、日本のカタクリに比べるとかなり大きい。カタクリを栽培するのは、必ずしも容易ではなく、野の花として鑑賞することをお勧めしたい。



三轟山(ミカモヤマ)のカタクリは、今や北関東最大のカタクリの里である(栃木県佐野市)。



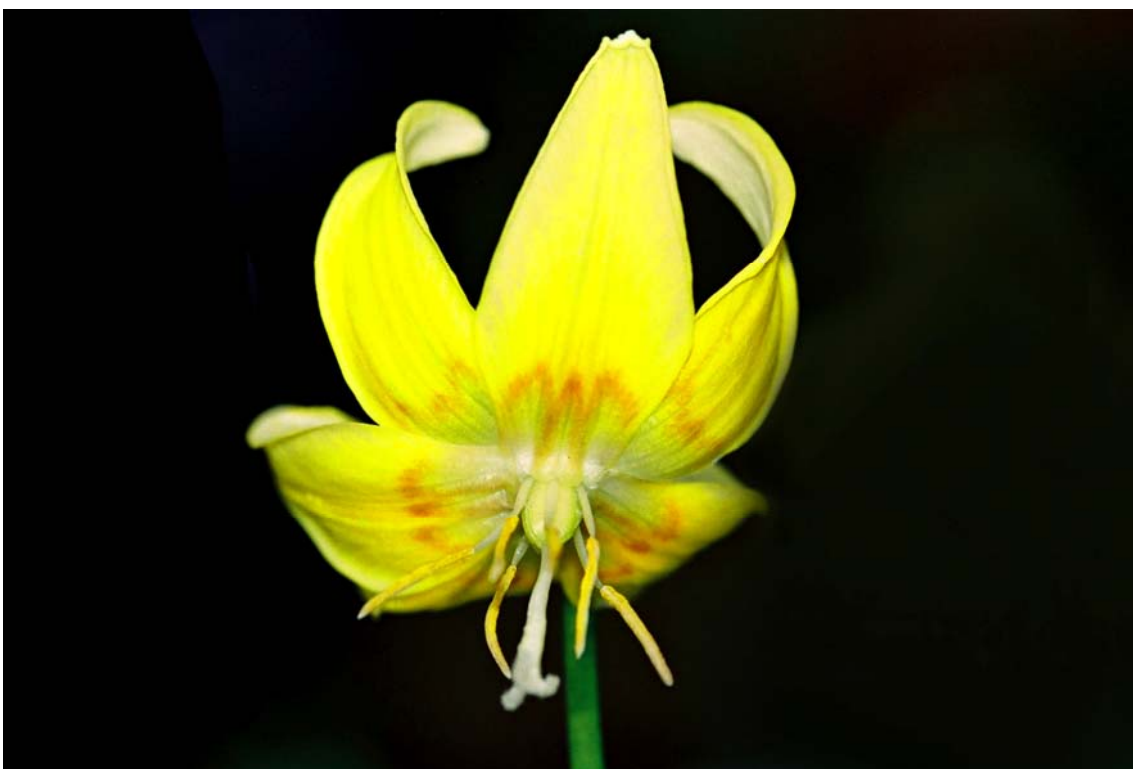
並んで二輪咲いた三轟山のカタクリ、シーズンには観光バスがやってくる(栃木県佐野市)。



三轟山のカタクリ、野草ブームの中カタクリ見物は手軽な観光なのだろう(栃木県佐野市)。



カタクリの群落、10年ほど前、仔猫を連れて遊びに来たことがあったが、その頃はまだ無名の自生地だった。最近では観光バスが押し寄せるほどの盛況ぶりである(栃木県佐野市三轟山)。



西洋種の黄花カタクリ(山梨県北杜市ハイジ村)。

[目次に戻る](#)